

裏切り

今日、私は愛くるしい赤ん坊を乗せて
乳母車をカタコトと押していた
眩い新緑の梢から反射してきた陽光を受けて
まるで無防備な初夏の空が白く輝いている
お前の誕生に加担した者としての
いわれのない不安と後ろめたさ
それらをこの子が感じはじめていたらどうしよう
それらをこの子が身にまとうことになったらどうしよう
許せ、私を許せ

今日もお前は笑顔で私を欺いた
いつかはお前自身を欺いていることに気付く
そして、そのときにこそ お前は棄て始める
恋人だと思っていた相手も
お前の産んだ愛くるしい赤ん坊も
そして、この私も
放埒という自由以外のすべてを・・・次々に棄て始める
ああ、それは避けられない
なぜなら、私自身がそれを希望しているからだ
お前自身が欲しているのだ、と
この手を汚さずに、思い込ませようとしているからだ

おお、詩神
私の虚栄を唯一満たしてくれる詩神
私のあらゆる欲望を解き放つことができる詩神
裏切るなかれ
もっと、もっと
ああ、もっと私を誑かせよ

今日もお前は笑顔で私を欺いた
私は、それをほくそ笑みながら溜め込んだ
もう、そろそろお前も気付くだろう
欺く必要などないのだ、と
棄ててしまえばいいのだ、と

おお、詩神よ
その時こそ

祝杯をあげるその時こそ
裏切るなかれ

(2005.5.3)